

セイラム魔女騒動に取材したアメリカ文学

鈴木 進

“Executed Salem witches get final exoneration in bill” という見出しの記事が、2001年11月3日の *THE JAPAN TIMES* に載った。新聞はセイラム魔女裁判の時に絞首刑になった Susanna Martin がこれでやっと安らかな眠りにつける、という内容のパラグラフに続き、マサチューセッツ州は処刑された5人の女性 (Martin の他に Bridget Bishop, Alice Parker, Margaret Scott, Wilmot Redd) の子孫からの申し出を受けて無罪を確定した、と伝えている。マサチューセッツ湾植民地のセイラム村 (現 Danvers) で魔女事件が起きたのは1692年のことであるから、実に309年ぶりに解決をみたことになる。

魔女裁判の犠牲者およびその子孫の名誉回復、権利剥奪撤回の措置はこれまでも数回行われたが、それらはいずれも十分とはいえず、前述5名の名前が無罪者リストから漏れていたというのである。

今回の無罪確定は、アメリカ人が21世紀に入ってもなお、17世紀末植民地時代の歴史的過ちを認め、その清算に努めようとする姿勢の現われと見ることができる。翻ってアメリカの作家たちもまた、彼らの時代と社会の中で、トラウマとして付き纏う魔女事件を素材に、さまざまな表現形式をかりて、作品を生み出してきた。古くは1692年に出版された Deodat Lawson の *True Narrative of Some Remarkable Passages Relating to Sundry Persons Afflicted by Witchcraft, at Salem* がある。それに続く作品の数は今日まで枚挙にいとまがない。

この小論ではそれらの中でも最も広く知られる Arthur Miller の *The Crucible* を中心に、アメリカ文学の中の小説、詩および劇のジャンルの中から数編を取り上げ、セイラム魔女事件のソースとその作品化という問題について考えてみたい。そこには作家の創作技術だけでなく、彼らの生きた時代と社会が見えてくる筈である。

個々の文学作品に入る前に、作品の素材となったセイラム魔女騒動とは何だったのかを確認しておかなければなるまい。しかし紙数が限られている本稿では、個々の作品を扱う中で、関連する史実に触れながら論を進めることにしよう。参照する史料としては Marion L. Starkey の *THE DEVIL IN MASSACHUSETTS*⁽¹⁾ (1969) と、同書に対して、時には批判的な記述もみられる Chadwick Hansen の *WITCHCRAFT AT SALEM*⁽²⁾ (1970) を主に用いることにする。

セイラム魔女騒動は 1692 年の初頭、セイラム村において、集団ヒステリー状態の少女たちによる魔女告発に始まり、次々と容疑者が逮捕、尋問され、5 月には Sir William Phips 新総督のもとに裁判が開かれた。そして 6 月 10 日に、早くも Bridget Bishop が魔女として処刑された。それに続き 7 月 19 日、前述の新聞記事の Susanna Martin の他に女性 4 人の絞首刑が執行された。その中の一人、Sarah Good の処刑に立ち合った Nicholas Noyes 牧師は彼女に自白をするようにすすめた。それに対する Good の返事は “I am no more a witch than you are. If you take my life away, God will give you to drink” だったという。史実はさらに、その 25 年後、Noyes 牧師は臨終の際、口から大量の血を吐き、それが喉に詰まって亡くなったと伝えている (Hansen, p.167)。

このエピソードを Nathaniel Hawthorne は故郷セイラムを舞台にした *The House of the Seven Gables* (1851) に用いた。小説では、Pyncheon 大佐が Matthew Maule の土地を手に入れようと画策し、彼に魔法使いの冤罪をきせて絞首台に送ってしまう。Maule は首に縄を巻きつけられたまま Pyncheon 大佐を睨みながら呪いの言葉をあびせる、“God will give him blood to drink⁽³⁾”。Maule の死後、大佐はその土地に七つの破風を備えた家を建てる。新築祝い当日、大佐が書斎の椅子に掛けたまま、喉に血を詰まらせて死んでいるのが発見される、というように小説は展開していく。Hawthorne は *The House of the Seven Gables* において、魔女騒動そのものを中心のテーマとしていないが、騒動の背後に土地獲得を巡る争いがあったことを見抜いて、プロットと絡ませているのである。

Hawthorne は “Alice Doan’s Appeal” など、魔女騒動に取材した短編小説も数編書いているが、なかでも “Young Goodman Brown” が有名である。この作品では魔女裁判直前の魔女の集会在扱われ、あの “spectral evidence” がプロット構成に使われている。

Hawthorne の *The Scarlet Letter* には、ヒロインの Hester を森の集會に誘う魔女 Mistress Hibbins が登場する。しかし、この小説はボストンが舞台であり、時代もセイラムの魔女騒動より 40 年近く前に設定されている。ところが、Hester が投獄されている牢の中で、セイラム魔女事件の発端となった奴隷の Tituba と出合うという、いわば時代錯誤小説が 1986 年に出現した。Maryse Conde の *MOI, TITUBA, Soreire Noive de Salem* がそれである。

この小説は最初フランス語で書かれ、後にリチャード・フィルコクスにより、*I, Tituba, Black Witch at Salem* の題で英訳され、1992 年にアメリカで出版された。92 年という年はちょうどセイラム市が“SALEM WITCHTRIAL TER-CENTENARY”の一連の行事を執り行った年でもあった。Conde の小説は日本では『わたしはティチューバ、セイラムの黒人魔女』（風呂本、西井共訳）が 1998 年に出て、一般読者に知られるようになった。

Tituba という女性については、「年齢・人柄・釈放後の身の上など、はっきりした記録がない⁽⁴⁾」（訳者あとがき）。その記録のない大部分の生涯を Conde が豊かに創造し、80 年代ならではの Tituba 像を描いている。Tituba に限らず、17 世紀ピューリタン社会における、虐げられた女性の地位の回復という思いが作者の胸にあったのであろう。さらに注目すべきことは、魔術に関して従来とまったく別の見方、魔術は、「西欧社会がしてきたような敵視や排除ではなく」、「癒しの術として畏敬の念を見せるクレオール文化」という描き方をしている点である。魔女騒動に取材する文学の新しい方向性が示されたといえよう。

Ballad の類は多少あるものの、セイラム魔女事件を主題とするアメリカ詩は多くないらしい。そのような中で、事件そのものではないが、19 世紀の詩人 John Greenleaf Whittier に“Calef in Boston⁽⁵⁾”という短い詩がある。その第一スタンザは

In the solem day of old,
Two men met in Boston town,
One a trademan frank and bold,
One a preacher of renown.

と始まる 40 行ほどの詩である。“frank and bold”と紹介された Robert Calef (1648-1719) という人物は、聖書に通じたボストンの商人で、魔女事件におけ

る Cotton Mather の言動を痛烈に攻撃したことで知られている。Cotton Mather は、いわゆる “The Jeremiad” の中で、魔女騒動を利用し、自己の影響力を強めて信仰復興を計ろうとしたといわれている。彼の *The Wonders of the Invisible World* (1693) も、高まる裁判批判から民衆の目を逸させ、裁判の公平さを強調し、政権を擁護する目的で書かれたという。これに対して Calef が *More Wonders of the Invisible World* (1700) をもって反撃した。論争は数年続き、その決着を Whittier の詩は “God be judge 'twixt thou and I” と Calef に言わせている。歴史家 Hansen はこれを「もうたくさんという気持ちにさせるような」詩と酷評し、そもそも Whittier という詩人は “inverted a picture of actual persons and events” であると言い、彼に対して極めて低い評価しか与えていない。

17世紀ニューイングランド・ピューリタンが虚偽をいかに憎んだか、現代人には想像もつかないといわれる。嘘をつくことは信仰を捨てる最悪の罪であったのだ。魔女裁判で処刑された者のうち、悪魔との関係を認めるといふ虚偽の告白を退けて死を選んだ者たちがいた。Rebecca Nurse や Martha Corey、そして前述の Sarah Good さえも然り。Martha の夫 Giles Corey の場合は、嘘の告白以前に、偽りに満ちた裁判自体を拒み、圧殺死させられた。保安官は Giles の胸の上に大石を積んで証言を迫った。彼はそれでも返事をせずに、彼の口からは「もっと重く」という声だけがもれ聞こえたという。

このエピソードを主題とし二つの劇が、いずれもニューイングランド出身の作家により書かれた。ひとつは Mary E. Wiks Freeman の “Giles Corey, Yoeman” (1892) であり、他のひとつは Henry Wadworth Longfellow の詩劇 “Giles Corey of the Salem Farms”⁽⁶⁾ (1868) である。しかし二つとも劇としては失敗作であった。詩劇の形が、時代に合わなくなったこともあり、Longfellow の場合はプロット自体に欠陥があったと思われる。

“Giles Corey of the Salem Farms” の劇詩はブランク・ヴァースで書かれた5幕ものの長い詩で、Longfellow らしい流暢な抑揚ではある。登場人物も少なく、魔女として告発を受けるのは Corey 夫妻だけ、告発する側も史実に残る数人の役割を Mary Walcott という少女一人に果たさせているのである。後に述べる *The Crucible* の劇で、Miller が、娘たちや裁判官の数を減らして、その者たちにすべてを象徴させる手法をとったのと共通する。

Longfellow の劇は第一幕三場において、Tituba の鏡の魔術にかかり、恍惚状

態に陥った Mary が一人の女性の生霊を見て次のように口走る。“She holds a spindle in her hand, and threatens/To stab me with it! It is Goodwife Corey!”と。信仰深い婦人である Martha Corey の名前が出たのに人々は耳を疑った。二人の教会役員が彼女の所に遣わされる。Martha は彼らに、“I do not believe/In any witchcraft. It is a delusion.”と断言する。セイラムの人々にとって魔女を否定するのは聖書を否定することを意味する。つまり Martha は無神論者になってしまうのだ。第四幕、予審の場、Martha は無罪を主張し、“I am a gospel woman”と言ったとたん、Mary は彼女の言葉を逆手にとって“‘You are a gospel witch!’”と、皆を扇動する。

法廷には夫の Giles が証言をするために呼び出されている。彼は妻にとって決して良い証人とはいえなかった。これまで彼が口にした不用意な言葉が Martha の嫌疑を裏付けてしまっていたのだ。他方 Giles 自身も、彼に悪意をもつ使用人の John Gloyd によって魔法使いの疑いをかけられている。さらに悪いことに、Giles はかつて一人の男を足で踏み、死に至らせた疑いを持たれたことがあった。その男の幽霊が、今 Mary に現れたという。“Look! Look! It is the ghost of Robert Goodwell, /Whom fifteen years ago this man did murder/By stamping his body!”

4月19日、Giles が起訴された。判事の尋問に一切答弁を拒否した廉により、彼は監獄近くの野外で、*peine forte et dure* (苛酷拷問) を受けた⁽⁸⁾。Giles の古い友人 Captain Richard Gardner が牢に駆けつけ、彼に自白をして生き長らえるように必死に説く。しかし Giles が良心を曲げることは遂になかった。*The Crucible* における John Proctor の最後と相通ずる、人間の良心に拘わる問題であろう。

拷問に耐える Giles が喘ぎつつ口にしたのは“More weight”だったと伝えられる。このひとことこそ劇を高潮させる鍵となるはずの言葉なのになぜか Longfellow はそれを用いていない。第五幕四場は、短く次のような場面設定で始まる。“A field near the graveyard. Giles Corey lying dead, with a great stone on his breast. The sheriff at his head. Richard Gardner at his feet:”。

鐘の音と共に Hathorne と Mather が登場する。Mather には“‘This poor man, whom we have made a victim, /Hereafter will be counted as a martyr!’”と言わせているのである。この台詞が詩人の言いたかったテーマであり、同時にそれはアメリカの国民文学への期待に答えようとする彼の企て

だったのではなからうか。ただしそれにしてはあまりに短く、劇としての効果と発展を見ないままで終わってしまう不満を拭えない。Wagenknecht も “the last two scenes are so brief as to suggest that the writer had tired his work and put it out of the way as quickly as possible⁽⁷⁾” とまで言っている。結局 Longfellow のこの劇は舞台で一度も上演されることがなかったという。

劇は文学の他のジャンルと異なり、舞台にのせられてはじめて作者の意図を伝えることができる。劇作家はそのため、会話の他に、上演をする上でのさまざまな指示や説明を加える。しかし、Arthur Miller の戯曲 *The Crucible*⁽⁹⁾ を読む時にわれわれにはその長い語りや背景の説明が異様に感じられる。第一幕、序曲の前の “A NOTE ON THE HISTORICAL ACCURACY OF THE PLAY” という断り書きもそうである。ここには作者による *The Crucible* の劇と歴史的事実の関係が述べられている。 “This play is not history in the sense in which the word is used by the academic historian.” そして彼が続けて「魔女事件の本質 (essential nature) は外すことなく、登場人物も史実に従った運命を辿っている」というのは、いわば Miller 流の「歴史其儘」ということか。Miller はさらに「断り」を続け、史実に基づく正確さに努めつつも、劇的効果 (dramatic purposes) を考え、事件に関わった人々を数人にまとめて演じさせ、裁判における告発者 Abigail Williams の年齢を引き上げた (raised)、と述べている。Miller のこの言葉をどう理解すべきか、議論をよぶところであろう。

しかし歴史的忠実さと劇的効果の関連でいえばその最も大きな問題は、Miller が彼の劇から「魔女はいないもの」⁽¹⁰⁾ としてしまった脚色ではないだろうか。忘れてならないのは、セイラム魔女騒動は 17 世紀末のマサチューセッツ湾植民地の出来事であって、そこには魔女は存在し、人々が魔法を信じるのは一般的であったという点である。「魔法使いの女は、これを生かしておいてはならない」(「出エジプト記」22:18) と聖書に記されている以上、魔女や悪魔の存在を疑うことは神の存在を疑うと同様の冒瀆 “To doubt the devil was a blasphemy on a par with doubting God Himself” (Starkey p.53) であったのだ。

さらにもうひとつ、セイラムの人々にはニューイングランド建設という大きな使命があった。彼らの目的 “a city upon a hill” の完成には神との契約に忠実であるだけでなく、共同社会構成員相互が契約を遵守することによってのみ実現するのである。いずれの契約違反も神の罰を受け、その結果、共同社会は

崩壊してしまう。セイラムの騒ぎは悪魔が建設を阻もうとして仕掛けたのに違いない。然らば悪魔の手先として契約を結んだのは誰か。斯くして、魔女狩りは避けられなかったのである。

Miller は当然史実を綿密に調査し、これらの事実を十分に承知の上で、*The Crucible* を書いている。それでは魔女不在という大前提のもとで、そもそも魔女狩りの劇は成り立つのだろうか。魔女というものが存在しないなら、なぜ20名の男女が魔女として処刑されなければならなかったのか。合理主義の支配する現代の読者（劇の観客）がそれを受け入れる蓋然性が必要である。その困難を乗り越えるため Miller の取った工夫が、Abigail の年齢を実際より引き上げる、という「歴史離れ」であった。史実によれば、彼女は事件当時11歳であったという。それを Miller は17歳の適齢期に年齢を多くするという、史実の決定的捏造をやったのだ。それだけでなく、彼女を“a strikingly beautiful girl”として、John Proctor の姦淫の相手に仕立て上げ、魔女狩りの動機に合理的根拠を与えたのだ。

Abigail がかつて Proctor 家の召使いであった頃、一家の主婦の Elizabeth は料理も家事も不得手な、そのうえ病弱で、夫を厳しく裁く妻であった。そのような中で Abigail が Proctor に同情をよせ、やがてそれが彼を慕う気持ちに変化していくという設定はいかにも現代人の眼に適すものと言えよう。

しかし Proctor を慕う娘というのなら、Proctor 家の女中、20歳の Mary Warren のほうがかえって近い人物のように思われる。Starkey によれば、彼女は Proctor の男らしさに好意を持っており、家庭が冷たいのは Elizabeth のせいと感じていた。だから Elizabeth が魔女の告発を受け逮捕されたのを内心喜んだのであろう、と。さらには娘たちが次々と告発を続ける中で Mary は“stubbornly refuse to make a direct accusation of her master.”, (Starkey, pp.95~101) と記している。この Mary 像は、*The Crucible* に描かれた Abigail そっくりではないか。Miller の劇では Mary Warren の性格を Abigail に演じさせている。これが劇作家の“many characters to be fused into one ;” ということか。Miller のいう「劇的効果」(dramatic purpose) のための「歴史離れ」であろう。

The Crucible 第三幕では、教会事務室を法廷として、Danforth 副知事が裁判を進めている。Proctor は魔女として告発された妻を救うために、少女たちの虚偽を暴露し、その裏付けとしての証拠を示さなくてはならなくなる。逡巡の末、

Proctor は公衆の面前で遂に Abigail との姦通を自白する。生霊に苦しめられる仕種の Abigail の髪をつかみ、引きずり倒した Proctor は “It is a whore!” と叫ぶ。それに対して Danforth が証拠を求める。Proctor は人生の破滅を恐れ、身を震わせつつ “I have known her, sir, I have known her.” と告白してしまう。もちろんここで使われている “know” は「マタイ福音書」1章25節の “know” と同じ用法だが、こちらは文脈から “fornicate” の意味である。

Proctor の告白の真偽を Danforth が確かめる決定的場面において、「嘘をつくことのない女」 “That woman will never lie” の Elizabeth が初めて嘘をつく。夫の名誉を守るため、姦通の事実を否定するのである。裁判では魔女騒動が Abigail の個人的な復讐によるもの、という Proctor の証言が退けられた。それにもかかわらず、この時までには裁判の誤りに気付いた Hale 牧師は即刻裁判の中止を求める。第四幕に入ると、Danforth 自身の確信にも僅かばかりの迷いがみられる。権力悪の象徴としての Danforth 描写の不徹底を Miller が認めるところである。しかし今更処刑を延期すれば権威は失墜してしまう。Danforth の “Postponement now speaks a floundering on my part; reprieve or pardon must cast doubt upon the guilt of them that died till now.” という言葉には彼のメンツが表われている。

魔女は存在しないという大前提のもとに、魔女騒動の劇を成り立たせるためには Abigail を悪の張本人として追求しなければ整合性が得られない。そこで劇の幕が降ろされた後の “ECHOES DOWN THE CORRIDOR” には “The legend has it that Abigail turned up later as prostitute in Boston.” という Abigail の悪の駄目押しまで加えている。史実ではその可能性は薄いという⁽¹¹⁾。この事実の書き換えも、「劇的効果」のためであろう。

不条理な裁判の中、Proctor はたとい偽りであっても、告白をして家族のために生き延びたいと願う一方、死をもって己の良心に従おうとする、そのどちらを取るか、決断が迫られる。葛藤の末、Proctor は自己に対する真実を選び、刑場へ連行されて行く。牢獄の中の妻は鉄格子に縋りつつ、このような夫をたたえて叫ぶのである。 “He has this goodness now”。この Elizabeth の台詞でもって劇の幕が下ろされる。

この時、朝日を顔に受けつつ夫を見送る Elizabeth の表情や仕種を、戯曲を読むだけの読者はそれぞれに頭に描くしかない。劇場ではそれが演出家の手でどのように演出上演され、観劇する側の反応はどのようになるものか。 *The Cru-*

cible が発表されてすでに半世紀以上たつが、その間この劇が演じられた時代や社会状況により上演の解釈、観客の反応に大きな違いが生じた筈である。

The Crucible の初演はブロードウェイの Martin Beck 劇場にて、1953年1月22日のことであった。McCarthyism の頂点にあつて、当然観客の反応は大変冷たいものであつた。近くは本年2002年3月7日より6月8日まで、Virginia 劇場で再演された。Proctor 役の Lian Neeson が鬼気迫る演技を見せたと新聞は伝えている。観客の中には、今回の上演と昨年9月11日の同時多発テロ後のアメリカ社会、特に個人の良心との拘わりの問題を重ね合わせた者が少なくなつたと思われる。

自伝の中で Miller が言うように、*The Crucible* の上演は時と所によって違った意味を持つ⁽¹²⁾、とは至言である。

この劇の素材となつたセイラム魔女事件は決して好事家や歴史家だけの専売特許品でない。そこに普遍的な人間性の真実に迫る問題を内蔵しているからである。さらにアメリカの作家たちは事件の中に、同時代的類似性を見出し、作品を生み出してきたし、今後も生み出すことであろう。

注

- (1) Starkey, Marion L., *THE DEVIL IN MASSACHUSETTS*, Doubleday & Company, Inc., New York, 1969., 邦訳、市場泰男『少女たちの魔女狩り』、平凡社、1994年。
- (2) Hansen, Chadwick, *WITCHCRAFT AT SALEM*, George Braziller Inc., 1970., 邦訳、飯田実『セイラムの魔術』工作舎、1991年。
- (3) Hawthorne, Nathaniel, *The House of the Seven Gables*, Ohio State University Press, 1965., p.8.
- (4) マリーズ・コンデ、『わたしはティチューバー——セイラムの黒人魔女』風呂本惇子・西井のぶ子訳、新水社、1998年、313-314頁。
- (5) Whittier, John Greenleaf, *POEMS OF JOHN GREENLEAF WHITTIER*, Houghton, Mifflin and Company, Boston, 1884, pp.144-145.
- (6) Longfellow, Henry Wadworth, *The Poetical Works of Longfellow*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1975, pp.495-522.
- (7) Wagenknecht, Edward, *Henry Wadworth Longfellow*, Unger, New York, 1986, pp.180-81.
- (8) “Monday, Sept. 19, 1692. About noon, at Salem, Giles Corey was press’d to death for standing Mute; much pains was used with him two days, one after another, by the Court and Capt. Gardner of Nantucket who had been

of his acquaintance: but all in vain....”

“In an open field near the Salem jail, Giles Corey, about 80 years of age, was put to death by officers of law, who placed heavy stones on his supine body, adding them until his life was extinguished. This was in strict accord with English law, but the case stands alone in American annals, *peine forte et dure* was the punishment for standing mute and of refusing to plead to an indictment...” *THE DIARY of Samuel Sewall*, edited by M. Halsey Thomas, Volume I · 1674-1708, Farrar, Straus and Giroux, Inc., New York 1973, p.295.

- (9) Miller, Arthur, *The Crucible*, Penguin Putnam Inc., New York, 2002., 菅原卓訳『るつぼ』早川書房、昭和42年、を参照した。
- (10) 小池美佐子「マッカーシズムとアメリカ演劇——『るつぼ』を中心として」、末永・石塚編『戦後アメリカ演劇の展開』（文英堂、1983）に教えられた。
- (11) It is irritating not to know exactly which of the afflicted girls “went bad.” Certainly they did not include Anne Putnam, Elizabeth Parris, and probably not Abigail Williams, Mary Walcott, or Elizabeth Booth. That they did include others is indicated by a statement in the reversal of the attainder in 1711 which speaks of “some of the principal accusers” as having “discovered themselves to be persons of ploffigate and vicious conversation.” *Historical Collections of the Topsfield Historical Society*, XIII, pp.135-7.
- (12) 『アーサー・ミラー自伝』（下）倉橋健訳、早川書房、1996年、91頁。

参考文献

- Johnson, Claudia and Vernon, *UNDERSTANDING THE CRUCIBLE*, Greenwood Press, London, 1998.
- Westbrook, D. Perry, *A Literary History of New England*, Lehigh University Press, Bethlehem, 1988.
- 粹川 羔 「魔女の世界」大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』南雲堂、1971年。
- 小森陽一編 『岩波講座文学9、フィクションか歴史か』岩波書店、2002年。
- 小山敏三郎 『セイラムの魔女狩り』南雲堂、1991年。
- 島田太郎 「セイラムの魔女裁判と『坩堝』」、本間長世編『現代アメリカ像の再構築』東京大学出版会、1990年。
- 巽 孝之 『ニュー・アメリカニズム』青土社、1995年。
- 森 林太郎 『鷗外全集』第26巻、岩波書店、1989年。